

女 佐々木信綱

わかくさのうら若妻の子もり歌

木立をもれて遠くきこゆる

うら若き少女心のはこりに

など行末をおもはさりけん

同 篠崎 正

夫の病三年なほらす子をたきて

手仕業しつゝすこしゆく哉

同 池田 愛子

うまむらのいくさ遊びをたのしげに

老女なかめをる竹垣のうち

同 佐藤 朝恵子

ほしかりしをのこ生れて鯉のほり

我軒端にもたてしうれしさ

古塚 布士のや

こほろぎのちよどなくもあはれなり

をさなきひとやこの塚の下

大洋

ともすれば濁り勝なる世のひとの

こゝろをあらへ大洋のなみ

竹柏園歌會競點歌

草花

市にかうてうゑし草花町中のせまき小庭のながめなりけり
加藤 艶子

茸狩の道ふみかへて八千草の花さく野邊に出にけるかな
佐藤 朝恵子

咲つゞく秋の千草のあやにしきふまゝくをしき野邊の通路
増山 三雪子

さりそへて見るとうれしき秋草の中にみなれぬ異國の花
板倉 正子

やみ臥して水もやらねばいけおきしすゝきの葉先あかくなり鬼
淺井 鏡子

なほざりに刈のこしたる道のべの小草も秋は花さきにけり
吉田 静子

我やどは野守の庵さなりにけり尾花葛花ささみだれつゝ
藤 平雪子

名も知らぬ異國の花も打まとり庭は千草の錦なりけり
板倉 藤子

刈さるも物うきまゝに捨おきし庭の八千草花になりけり
鈴木 光子